

キリスト教の アジア的コンテキスト

加山 久夫

21世紀に入ると、欧米以外の地域のキリスト者が約16億のキリスト者人口の過半数を占めるようになると予想されています。今日のアジアにおいては、カトリック国フィリピンのほかに、キリスト者人口が国民全体の25%を超える韓国が顕著な例ですが、中国でもキリスト者の数が増えつつあると聞いています。しかし、私はここで宗教社会学的な動態について述べようとしているのではなく、昨秋、招かれて訪ねたアメリカ訪問の印象を短く報告したいと思います。

アメリカ・カナダを中心とする Society of Biblical Literature

(SBL)は約130年の歴史をもつ国際学会ですが、最近では、American Academy of Religion (AAR) というもう一つの大きい学会と同じ時同じ場所で学術大会を開催していますので、3000人近くの人が出席するようになり、開催可能な都市を探すのが大変になってきているという始末。その中でここ数十年確実に顕在化してきたのは女性の参加ですが、それと共に、いわゆる白人以外の人々の参加です。これまで圧倒的に西欧中心的な研究領域となっているキリスト教研究、特に聖書学について、これら新たな非西欧人研究者のあいだで反省の声が上げられるようになりました。そのひとつの結果として、1995年度から新たに、Asian and Asian-American Biblical Studies Consultation が数十ある研究グループの一つとして設けられました。私が発表を求められたテーマは "History and Issues in Japanese Biblical Interpretation" でした。アジアと言っても、アジアの国々はそれぞれ個々の歴史や文化をもっており、アジア系アメリカ人となると、また違う。そもそも、テキストとしての聖書を学問的に研究するのにこのような民族的文化的要素が作用するものなのかどうか、という疑問もあるかもしれません。しかし、圧倒的に優位に立ってきた西欧のキリスト教研究に対して、これからはそれから学びつつも、もっと違った、より広い視野（コンテキスト）からキリスト教あるいは聖書というテキストを読むことによ

って、テキスト理解に新しいニュアンスを読みとることができるかもしれない。私はそのような期待をもっています。

上記学会が開かれたニューオリンズへの途次、私は Pacific School of Religion で講演するため数日パークレーに立ち寄る機会も得ました。120年の歴史をもつ、アメリカでもリベラルな伝統を持つこの神学校には、学務副学長をはじめ数名のアジア系教授がおられますが、その中に日系仏教学者もおられました。「異端的」ということで仏教研究所を離れなければならなかったこの方を神学校が教授として迎えていることに、この学校のふところ深さを感じるとともに、このような友情に基づく宗教観の対話を通して、生産的な成果が生まれるのではないかという予感を感じもしました。

アジアでも、アジアキリスト教協議会やいくつかの研究団体が呼びかけて、今年5月、Congress of Asian Theologians (CATS) が旗上げされることになりました。ここから何が生まれるのか未知数ですが、未知数であるだけに、アジア的コンテクストの中でキリスト教を共に考えようとするその新たな企てに少なからざる期待を寄せています。果たして、日本のキリスト教の研究者の中でどの程度そのような企てに関心を示すのだろうか、一寸不安です。それが私の杞憂に過ぎないことを心から願っています。

(かやま ひさお

所長、一般教育部教授)